

随筆

貴重な水辺のいくつか—12

ヴェルサイユの泉水—1

亀田 泰武*

1. はじめに

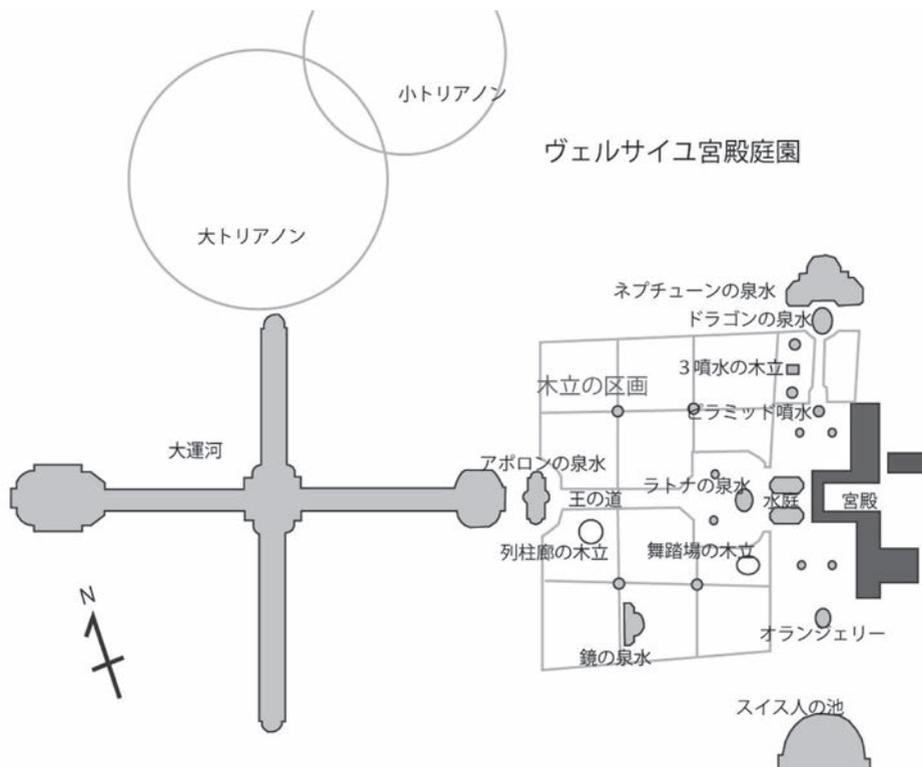
多くの人々がヴェルサイユを訪れ、宮殿の豪華さに感嘆していくが、ルイ14世が一番熱心だったのが、庭園の噴水池で、水回りのため造営費の1 / 3という多額の経費をつぎ込んだほどとされることはあまり知られていない。

実際、庭園は非常識な広さで、見学するのも大事である。宮殿から庭園の中心に位置するアポロンの泉水まで850mある。この先に延びる大運河は長さ1.5kmで十字の形をしていて橋がなく、奥まで行くのに2倍近い長い距離を歩かなければならない。現在の宮殿敷地

広さは9平方キロであるが、ルイ14世の頃は83平方キロもあった。

噴水の水源確保は常に大きな問題であったが、いまでも乏しいようで、噴水は週末にしか上げられない。週末は噴水祭Grand Eauxといい、入場料も高くなる。しかも噴水が始まるのが朝11時からで、運転時間も短いので、主要なものを見るのも入り口に置いてあるプログラムを見ながら駆け足の見学となる。

2年前にパリの個人旅行を企画して、混まないと思われた平日にヴェルサイユの入場予約までしたが諸事情により結局キャンセルになってしまった。昨年再び企画して、調べているうちに、噴水が上がるのが週末であることが分かり土曜日に計画した。以前キャンセ



ヴェルサイユ宮殿庭園見取り図

*KAMEDA Yasutake, (NPO)21世紀水倶楽部理事長

URL <http://www.mizumirai.net/sitema/>

ルしていなかったら、大運河など水辺はまわったもののこの素晴らしい泉水を撮影することはできなかったと思われ、中止したのがいい結果となった。雨男にしては珍しく秋なのに快晴が6日も続いたのも良かった。

実際、噴水は見事で、週末見学がお勧めである。

2. 大庭園事業のきっかけ

ルイ14世をかくも壮大な庭園建設に駆り立てたのは、財務長官であったニコラ・フーケが開催した大園遊会であったと思われる。

財政運営に優れ、多くの知識人と親交のあったフーケは、結婚1年後に亡くなった妻の残した遺産をもとに、5平方キロの土地を購入し5年かけて、かつてない規模の素晴らしい城館の建設に没頭した。当時新進気鋭であった、建築家のルイ・ル・ヴォー、画家のシャルル・ル・ブランと造園家のアンドレ・ル・ノートルに造営を任せた。

ヴォー・ル・ヴィコントの庭園は、宮殿正面の南北1.5kmの軸にきれいに刈り込んだ毛氈花壇、噴水池、大運河が配置され、大運河の回りにはカスケードや噴水が配置されていた。今でもスケールの大きさに感心するので、当時として驚嘆すべき規模、内容であったと考えられる。

城館の完成が近づき、フーケは大園遊会を開かざるをえなくなり、1661年8月17日ルイ14世を含む6千人が招待され、噴水や大運河に心をうたれ、晩には庭園が数千の灯りで飾られ、花火が打ち上げられ、客人は皆驚嘆した。

ヴォー・ル・ヴィコント城ではこの大園遊会を偲んで土曜日に2千本の蠟燭によるイルミネーションが灯



ヴォー・ル・ヴィコント城館
南の池から



ヴォー・ル・ヴィコント庭園
城館の塔から

される。

ルイ14世にとっては財務長官がこのような豪華な城館を造営したことがショックだったと思われる。園遊会からすぐ、9月5日にフーケは公金横領の容疑で逮捕され、裁判にかけられ有罪となり、二度と城館に戻ることはなかった。心血を注いで見事にできあがった家から突然連れ出され、牢獄に捕らわれて帰ることができなかった無念さは大変なものであったろう。ヴォー・ル・ヴィコント城の日本語オーディオガイドでは逮捕したのが三銃士のダルタニアンといていた記憶がある。

おそらくルイ14世は国王の威信にかけて、ヴォー・ル・ヴィコントよりも素晴らしい城館をつくらうと心に決めたのではないかと思われ、これがとてつもない規模の庭園造営の原動力となったと思われる。

ルイ14世はフーケが見いだし、ヴォー・ル・ヴィコント造営の中心であった3人の芸術家をヴェルサイユの建設に従事させた。庭園計画を議論をするため戦地に造園家のル・ノートルを連れて行ったほど、庭園の水景観に熱心であった。

3. 庭園の概要と噴水池

宮殿は西を向き庭園の軸線は東西方向となっている。太陽王を自負するルイ14世が、大運河などの水面に映って沈む夕日を見やすいように西向きとしたらしい。軸線は16度ほど北に寄っていて、外の景色が良く、太陽が北寄りに沈む夏場に合わせているのだろうか。ただ大運河が細長く遠いため、宮殿からちょうど大運河に沈む太陽を見ることができるのは限られた日になるだろうと思われる。庭園の配置は、ヴェルサイユ、ヴォー・ル・ヴィコントとも城館近くにフランス式幾



宮殿からの眺め
水庭の向こうにアポロンの泉水と大運河

何学造形の毛氈花壇（植え込みを、絨毯の唐草模様のように刈り込んだもの）、次に噴水を、その向こうに大運河と広い森を置くという構成である。外側に広い森を置いたのは、狩猟が領主の一般的な趣味であったので、狩猟場を近くに置きたかったからと思われる。ヴォー・ル・ヴィコントでは運河を遠くまでつなげて、将来の船の来航を見通したものであるが、庭園軸を横切る形の運河は位置が低くて城館から見えない。豪華な噴水やカスケードのある運河まで行ったときの風景の劇的な変化を狙ったものらしい。ヴェルサイユでは大運河を十字の形にして、西の端まで伸びる運河が見えるように城館からの眺望も考えている。

広大な庭園造成のため一時は3万6千人の人が働いていた。労働条件は厳しかったらしく、宿舎から毎朝のように死者を積んだ台車が出て行ったという。

一方、ルイ14世とル・ノートルが様々な噴水を次から次へつくっていたため、つねに水不足で、用水確保のため大きな費用がかかっていた。

3.1 水庭

宮殿すぐ前にある二つ並んだ池で、池のまわりにはフランスの川を表す16の彫刻と子供達の8つの彫刻合計24の彫刻が置かれている。池の北には花壇やいくつかの泉水がある。また南へはオランジェリーから広大なスイス人の池と南北へ庭園が延びている。

3.2 ラトナの泉

水庭の西、一段下がったところにある。噴水は4段の噴水で構成され、上にラトナと二人の子供の像がある。ラトナはアポロンの母で、彫刻はラトナと子供達（アポロンとダイアナ）が、池の持ち主の農民に水を飲みたいと頼んで拒否され、ゼウスが怒って農民をカ



水庭と彫刻



ラトナの泉水

エルに変えてしまったというギリシャ神話を題材にしているが、フロンドの乱鎮圧の意味も込められている。1687年に今の形が完成。

噴水はノズルも多く豪華であるが、一段下がった所にあるので、宮殿からは見えない。ラトナの泉の回りは広い花壇になっていて、花壇から西に緩い勾配の芝生で覆われた坂が約400mの長さでアポロンの泉水まで続いている。王の道と呼ばれ、道の両側には12の彫刻と12の花瓶が並んでいる。

王の道を挟んで北南にはBosquetという木立に囲まれたいくつもの区画が沢山ある。東西方向に3列、南北方向に2列ずつ4列で合計12の木立の区画があり、区画のヘリが道になっていて道の交点には噴水がある。各木立の中は様々な噴水などを持つ庭園になっている。数が多くていくつかしか紹介できない。

3.3 アポロンの泉水

王の道の西にある。太陽王として自分をアポロンに見立てたルイ14世であるので、庭園の中心的存在である。1671年完成。太陽神アポロンが地上を照らすた